

令和6年3月発行

企画・制作 DEJIMAGRAPH inc.

写真 田畑伸悟

発行 環境省 雲仙自然保護官事務所
〒854-0621 長崎県雲仙市小浜町雲仙320
Tel 0957-73-2423

印刷・製本 株式会社クラフィット

本書の収録内容の無断転載・複写・複製等を禁じます。

©2024 Unzen Ranger Office,
Ministry of the Environment. All rights reserved.



雲仙の日常



雲仙天草国立公園

国立公園指定
90周年記念誌

UNZEN-AMAKUSA NATIONAL PARK

雲仙

人

の

日常

PEOPLE, NEW WORK

昭和49年3月23日開業。基本的に休みはなし。雲仙温泉唯一のコンビニとして地元住民に親しまれる。品揃えは、半分コンビニ、半分スーパー。店主の林田さん夫妻は、自宅の小浜から毎日雲仙温泉へ通勤している。

〔記憶に残る日〕いい時も、悪い時も、噴火もコロナも全部。



11時頃の店内には、店内調理されたできたてのお惣菜がずらり。お昼時にかけて多くの人が詰め掛ける。野菜や果物は観光客のお土産としても人気がある。

〔林田商店〕



雲仙のいつもの風景、
いつもの仕事、いつもの人

国立公園のレンジャーというと、屋外で現場作業や調査、解説活動に汗を流すとてもたくましいイメージを持たれがちだが、その業務の大部分は許認可や予算執行で発生する室内での事務作業。自然や景観を守るために必要な書類のやりとりが粛々と行われている。温泉街で行っている工事の監督や立ち会いも業務のひとつ。日本のレンジャーは一般的な公務員に近いところがある。

〔環境省雲仙自然保護官事務所〕



〔雲仙お山の情報館別館近く〕





雲仙の自然の恵みは温泉だけではない。地獄の熱を利用してお湯にする自然の給湯システム「かんつけ」もそのひとつ。暮らしや商売に必要なインフラだ。1箇所につき一巻き約100メートルあるかんつけのパイプが10～20巻き入っている。硫黄で汚れるために定期的に洗浄が必要で、作業は1箇所あたり7、8人がかりで2日間かかる。写真は、かんつけのメンテナンスが終わったある日、現場を確認する関さん（長崎開発）。

「雲仙の自然」地獄も登山道も整備されたルートから、一歩山に入れば全然違う自然の顔がある。じっくり楽しんでほしい。

【雲仙地獄】

小浜消防署雲仙分駐所は2人勤務体制。よってベテラン職員が配属されることが多い。災害時は小浜消防署本署隊も出動するが、合流まで約20分かかる。2021年の土砂災害時も初動は2人で災害対応に当たった。災害対応業務のほか、旅館やホテルなどの火災予防査察及び消防訓練指導などの火災予防業務や救急支援活動も。地域住民の生命・身体・財産を守るため最前線で活動。22年間雲仙を守ってきた車両(2024年2月引退)と一緒に。

〔雲仙メモリアルホール〕



ミヤマキリシマに巻き付いたカズラを鎌で刈っている様子。雲仙の広大な自然景観を維持するためには、日々の地道な草刈りが欠かせない。島原振興局の業務にも草刈りが含まれており、美しいミヤマキリシマを見ることができるのも日々の草刈りの積み重ね。雲仙温泉では、高齢化と人手不足で以前のように入力がこなせない問題を抱えている。

〔宝原園地〕

ネイチャーガイドとして1つの得意分野があれば成り立つ地域もある。一方、雲仙は火山の成り立ちや地層、植物、生き物など広い知識を必要とする。「雲仙のことを雑に語りたくない。避暑地に選ばれた理由から丁寧に語りたい。」とお山の情報館の大町さん。この道14年目を迎えるベテランだ。

〔最近のニュース〕2023年、絶滅危惧種のトモエガモがおしどりの池にやってきた。この仕事をしていて初めての出来事。あまりにも数が多く、池の前の旅館からも心配の問い合わせが来たほど。県外からも多くの野鳥愛好家が観察に来ていた。

〔おしどりの池〕

〔雲仙お山の情報館〕



【雲仙温泉街】



雲仙の暮らしを支える移動販売。雲仙市では高齢者の見守り、買い物の楽しみの提供に取り組んでいる。伊藤鮮魚は週に5日、島原から新鮮なお魚を乗せてやってくる。もう一台は、主に野菜を乗せたトラック。2023年からはコンビニの移動販売も始まっている。

【雲仙温泉街のあちこち】



【雲仙温泉街のあちこち】



雲仙温泉を担う宿泊業を支える現場スタッフ。
雲仙九州ホテルで客室清掃のリーダーを務める井手上さん。見た瞬間に飛び込みたくなるベッドメイクが信条。

【記憶に残る日】お客様から、ベッドメイクが美しかったと客室のメモに書き置きがあった日。

〔雲仙九州ホテル客室〕



雲仙の自然の恵み、温泉。熱いお湯がクセになるだんきゅう風呂は温度も湯量も天候次第とまさに自然の恵み。土砂災害の時にはお湯が止まり温泉をやめる覚悟もした。幸い復活したがお湯の成分は様変わり。鉄が増え、PHも上昇。成分表を新しく作り直した。新たなお湯に、常連さんは「今日もよか湯やった」と太鼓判。

〔だんきゅう風呂〕

わたしの推し 雲仙の話

雲仙天草国立公園。

その自然に日々仕事で

関わる3名が綴る、雲仙の話。

Q 雲仙の日常の風景といえば

雲仙地獄から立ち上る湯けむり。硫黄の匂いと前が見えなくなるほどの湯けむりで、雲仙まで(戻って)来たと実感。



温泉街にある共同浴場は、地元の人、子ども、赤ちゃんもそして観光で来られたお客さんも利用します。さまざまな人たちがここで「裸のお付き合い」をする日常。

昔の雲仙の住宅にはお風呂が無いことが多く、地元の人も共同浴場を利用していたことが現在も続いていてこの日常を産んでいるのだと思います。



清七地獄など湯けむりの中にいる観光客。いつ見ても観光客がいて「ここは観光地なのだ」と思われます。



Q 知ってほしい雲仙の鳥

アオゲラ(最近温泉街によく出没している)



エナガ。珍しい鳥ではないですが、かわいい表情が好きです。



Q 雲仙の自然ここが推し

全体としては二次的自然(=人の手が加わることで成立した植生や景観)でありつつ、それらがすぐ間近にある火山と融合してできたとても独特な自然景観。雲仙の人々が、古来から自然の恵みを活用しつつ営んできた歴史がそのまま、今の雲仙の自然や景色を作っている。また、雲仙温泉街などでは自然の恵みをプラスの形で受け取ることの方が多いのに対して、島原市側では噴火による土石流や火砕流災害など防災の観点からの関わりが中心を占め、山の東西では状況が大きく異なっていることも忘れてはならない。



どこにでもあるわけじゃない、活火山が作った景観。登山で活火山のそばに行けるし、街中では地獄で活火山を感じることができる。



ミヤマキリシマや紅葉、霧氷など、仁田峠から見られる四季折々の自然景観。



Q 日々のジレンマ

整備された道しか通らないで!と言いつつも、外れたところに魅力的なものがあったりする。さまざまな感覚を使った体験をしてほしいけれど、積極的に推奨できないことがある。



Q 国立公園として維持するために必要なこと

制度や計画にしても施設にしても、一度作られればそれで完了というわけではなく、それを手直ししつつ機能的に維持していくことの方が全体で見た時にははるかに大変なこと。そこでは気力や忍耐力、ノウハウ、予算、技術など様々なものが必要になるが、非常に残念かつ申し訳ないことながら、環境省でも雲仙温泉の中心を占めている所管地や公園施設を十分に維持・管理し切れていないという現実もある。



自然保護と開発のバランス。「国立公園＝世界に誇れる自然」なので観光のためにこれが損なわれることだけはあってはならない。5年先10年先もしっかり見据え、観光資源としての活用を基本軸にすることが大切だと思う。



屋根や外壁の色などが統一されていることで美しい街並みを形成している。行政だけではなく、地域の方の理解や協力が必要だと思う。



Q 忘れられない1日

工作中に、火山やジオパークが好きなお客さんとお話が盛り上がり、そのあと仕事おわりに絹笠山で夕日を見る。夕日の反対側には地球影。地球は丸いんだ…ということが肌で感じられた。「地球好きだなあ」という気持ちが発した1日だった。



環境省 自然保護官(レンジャー)
東京都 八王子市出身/2022年4月着任

ひとこと いろいろあった日の夜は新湯共同浴場に漬かってシメるのが一番。



雲仙天草国立公園
お山の情報館 自然ふれあい担当
長崎県 島原市出身/2010年アルバイトからはじめて足掛け14年

ひとこと ヒカゲツツジとヤマアジサイはどちらも九州一レベルの群落。九千部のジンジソウ大群落もおすすめ。



長崎県 自然環境課 島原振興局 主任技師
長崎県 南島原市出身/2022年4月着任

ひとこと 雲仙温泉街からさほど時間がかからず登れて温泉街を一望できる絹笠山がお気に入り。

Q 自然を生かした雲仙の文化や営みと聞いて浮かぶもの

温泉街の文化や営みの内、以前から続いているもののほぼ全て。自然共生社会を地で実践してきた場所だと思う。



凍り豆腐(今はないけど)



地獄の蒸気を使った温泉卵。小さかった頃、そして今子供を連れてきたときはいつも温泉卵を食べている。地熱を活用した雲仙の文化。



Q いまいち人気はないけれどぜひ体験してほしいアクティビティ

星空観察会。宇宙好き、惑星探査好き目線の星空観察が楽しめます。小難しい数字の話やメルヘンな神話の話は無し!



Q 知ってほしい雲仙の植物

普賢岳紅葉樹林の中に点在している常緑のヤマグルマは、被子植物の中でも原始的な特徴を持っており、系統分類的にも生態的にもかなり独特な樹木。普賢岳登山道沿いでも、岩肌にへばりつくように伸びるその変わった姿を見ることができる。同じく普賢岳登山道沿いで見ることができるオオヤマレンゲはモクレンの仲間、春～初夏に大きな白い花を咲かせる。雲仙では平成の噴火によって生育地が一時全滅していたが、その後に地中で休眠していた種子から復活したと考えられている。



Q 自然以外の雲仙の魅力とは

自然と隣り合わせで育まれてきた歴史や文化がどれを取っても特徴的かつ魅力的。火山の恵みである温泉とその利用方法、外国人避暑地以来の洋風文化など、他所には無いものがたくさんある。



長い長い歴史。地質や地形の上に歴史や文化は造られて、それらは人の営みで全てがつながっている。



避暑地としての歴史を感じられること。



Q 未来に向けて

国立公園では規制や計画による様々な制約があり、時として不便さや大変さがある。しかし最終的には地域の質を維持・向上させるためのツールの一つになってくれる。今では国立公園の仕組みも地域づくり的な面の比重が高まっており、環境省でも協働型管理運営といった考え方に基づいて各国立公園とその地域の質的維持・向上に取り組んでいる。国立公園の特質が地域にとっての有効な武器となり、国立公園というものが「地元のもの」になれたらいいと思う。長い歴史の過程で社会状況も刻々と変化している中、来る100周年が本当に実りあるものとして迎えることができるかはこれからの取り組みにもかかっていると思う。



自然と地域の共生。国立公園内では各種行為が規制されており、何でもできるわけではない。その中でも自然の価値を守りつつ、魅力を創出するような取組を推進できる持続可能な観光地になればと思う。



生まれ変わるように 頑張らにゃ〜

七條 健 さん



雲仙九州ホテル前社長
「雲仙を美しくする会」前会長
雲仙温泉街出身／1937年生まれ(87歳)

岡本太郎さんの金言

雲仙でお迎えして印象的だったお客様のひとりが、芸術家 岡本太郎さんです。一緒に雲仙ゴルフ場を回ったとき、周囲に人がおらんと確認した岡本さんは「こんなに気持ちがいい天気なんだから、どうせなら裸になってゴルフしよう」と言うやいなや、上半身裸になってしもた。そしてその姿でじっと妙見岳の方を見つめて「あの山が私と相撲取ろうと言っているぞ」と。返答に詰まりながらも、やっぱりこの人は感性がまるで違うと感心しました。

数年後、その山から噴煙が上がったときには、あの方には何か感じるもんがあったとやろうかと、自分勝手なストーリーを作り上げたりしたもんです。

岡本さんは今後の雲仙について「雲仙はいま一面性しかないから、二面性を持つようにつくられたら、もっと良くなりますよ。世の中にはプラスとマイナス、男と女、両面あるからスパークするんです」と語りました。雲仙にとっての二面性とは何だろうか。自然美と人工美、新湯と古湯、はたまた国内客と海外客…。あれから数十年「二面性」というキーワードは私の中で色褪せることはありません。

国立公園指定の裏に、先人たちの努力

国立公園指定について「自然豊かな雲仙だから当たり前」と思う人が多いけど、ほっといってなったもんじゃなくて、その裏には先人たちの並々ならぬ努力があるんです。他人様からお助けいただいてようやく指定されたもの。雲仙で飯を食いよる人間は、もっとちゃんとせないかんと思います。

1931(昭和6)年に国立公園法が施行されて、どの地域を指定するかという委員会で、雲仙を全力で推してくれたのが長崎出身の西岡竹次郎衆議院議員(のちの県知事)でした。西岡竹次郎議員はリーダーシップをとって県内の政財界や県民に働きかけ、「雲仙を国立公園に」と言う機運を高めました。特に長崎市民のお力添えが大きかったと聞きます。ちょうどその頃、毎日新聞が全国の名勝地の人気投票を行ったので、県民みんなでせっせとハガキを送ったら、雲仙は名勝地 山岳部門で1位になって、これが大きな追い風になった。西岡竹次郎議員は「もし雲仙ば指定せんやったら、長崎県民は国税ば払わんぞ」とまで言うたそうです。

そうやって多くの人たちのおかげで雲仙は国立公園になったわけです。先人たちの努力なくして、今の雲仙はありません。ちなみに竹次郎議員の息子、西岡武夫

くんは雲仙小学校時代の友人。その後、お父さんと同じく国会議員として数々の偉業を成し遂げてくれました。

忘れられない1日

1998(平成10)年4月26日のことは忘れられません。

噴火前の雲仙は団体客を中心に大人気で、年間宿泊数100万人にもうすぐ手が届くかという時期でした。当時は旅館ホテル組合の組合長や、雲仙を美しくする会の会長も務めてましたから、地元の仲間たちと100万人を目指してもうひと踏ん張りしようやと、あの手この手で奮闘してました。そしたら噴煙が上がりが始めた。火山活動を見物したいお客様が一気に押し寄せて街は大忙し。「普賢さんも応援してくれよる」と喜んでいたのも束の間、状況はどんどん悪くなり大きな災害にまで発展してしまいました。

開山の日は久しぶりに笑顔で普賢岳に登ることができました。一步一步踏みしめるたび、噴火活動が始まってから7年半に起きたこと、苦悩の日々を思い出しました。開山の式典も行われ、大変な時期を乗り越えた仲間たちと手を取り合って喜びました。間近で見た平成新山の山頂はなんと、雲仙のホテルの屋根の色と合わせてくれたかのような赤茶色。普賢さんの新たな表情に「ここからが頑張りどき」と気を引き締め直しま

した。この日の新聞記事の切り抜き、開山式の式典資料はいまでも大切に保管しています。

地元の者が自ら動く力

以降、必ず年に1度は山頂まで登って山の状態を見てきました。お客様に戻ってきてもらおう、この普賢岳登山をきっかけに自然との共生について考えてもらおうと、雲仙の旅館経営者たちは花や鳥などについて猛勉強をして、毎週日曜には自ら山のガイドを買って出ました。苦しいときこそ経営者が自ら先頭に立って行動せんばいかんと。

そしたらやっぱりお客様にものすごく感動してもらえた。自分が思ってもないことは、他人には伝わらん。自分が心からいいと思って、伝えたいと思って初めて相手に伝わるんだと改めて学びました。登山客はまだまだ増やせると思います。いきなり頂上は難しい人にも、途中の安全な場所に数カ所の展望台があるといんじゃないだろうか。ずいぶんあちこちに働きかけてみたけど、まだ実現してない課題の一つです。

近年、地元のために一生懸命動いてくれた若者の1人が、雲仙温泉観光協会にいた森優子さんでした。雲仙のことを知って発信しようと、私に積極的に話を聞きに来てくれる若者は珍しかった。これからの雲仙を担う人物になると信じ

ていたし、まるで娘や孫のように思っていました。土砂災害(2021年8月)の犠牲になり32歳でこの世を去ったことは、本当に残念でなりません。街全体が悲しみに沈みながらも、彼女の思いをつなごう、彼女の分まで頑張ろう、そんな底力を地元の私たちに湧かせたのは、紛れもなく優子さんの力でした。

私の好きな雲仙の景色

雲仙の街を一望する絹笠山からの眺めと、地獄から見る雲仙九州ホテルの風景が好きです。植物ならシロドウダン。これは天然記念物に指定されていますが、地元のものにとっては身近な花です。小学校までの通学路にもたくさん咲いていました。

子どもの頃、旧八万地獄には草ひとつないから「月面地獄」と呼んで、おそらく月面はこんな感じやろうなと、想像しました。

土壌の変化とともに、雲仙の植生も変わったんでしょう。昔は赤松がたくさん自生していたんですが、火山性のガスや降灰、温暖化の影響で枯れ続けています。それに代わるように、以前はほとんどなかった山桜が伸びてきました。宝原つつじ園が桜の花見まで楽しめる名所になったのは驚きです。これだけ大きく景色が変わるのは、火山が身近な雲仙ならではのことでしょう。

雲仙をいつまでも美しく

「雲仙を美しくする会」は1965(昭和40)年から続く、雲仙の住民全員が会員の活動です。地元一丸となってこの自然を永遠に美しく残していこう、美しい雲仙にお客様をお迎えしよう、との理念のもとスタートしました。定期的に温泉街や登山道の清掃、国の天然記念物指定「池の原ミヤマキリシマ群落」保全のための下刈り作業などを行なっています。27年間会長を務めたので、この会には特に思い入れがあります。これからも雲仙の美しい自然、景観が続いていくことを願います。

人間で言えば「卒寿」

雲仙のためにたくさん考えて動いてきたつもりですが、私自身失敗も多かった。それでも挑戦し続ける姿勢は持ち続けたいと思っていました。

国立公園に指定されて90年。人間であれば卒寿で、人生も一応卒業しようかという時期です。私もあと3年で90歳なので、ほぼ同年代。人間も雲仙も、いよいよ生まれ変わらにゃいかん頃じゃないでしょうか。世の中が豊かであろうが厳しかろうが、「自分たちの郷土は自分たちで守っていこう」という意識を、地元の者たちが強く持ってこそ、力の出るとは思いません。